

## 第1話 歌謡御三家の登場

### ■「三丁目の夕日」の時代に映画の衰退が始まった

わが家にテレビが来たのは、日本中の多くの家庭と同じく1959年（昭和34年）4月の皇太子（現在の天皇）ご成婚に際してだった。

53年に放送が開始されたテレビジョンは、田中角栄郵政大臣（のちの総理大臣）の積極的認可政策により58年から59年にかけて多数の民間放送局が誕生し、普及のスピードを一気に速めた。ちなみに、その時代を描いた映画『ALWAYS 三丁目の夕日』（05 山崎貴）の主人公一家・鈴木家にテレビが来るのは58年の夏である。さらに加速度がつくのは59年の春。皇太子ご成婚祝賀パレードを見るためにテレビを買う家が一気に増え、テレビ普及200万台を突破している。

当時の所帯数が約2000万だから、所帯普及率約1割だ。ただし、放送が行われるのは都市部に限られていたから、わたしの住んでいた福岡市のような大都市では、もっと高い比率になった。それまでは、『ALWAYS 三丁目の夕日』の鈴木家のようにテレビのある家に近所の人が集まって大勢で見っていたが、わたしの家に人が集まってきた記憶はない。この頃から、テレビは各家庭内のものになっていく。

52年生まれわたしは、この年の4月小学校に入学した。また3月には「少年サンデー」「少年マガジン」の2誌が創刊され、週刊漫画の時代が幕を開ける。皇太子ご成婚の10日後には東海道新幹線の起工式が行われ、5月には64年の東京でのオリンピック開催が正式決定した。7月には児島明子が日本人として初めてミス・ユニバースに選ばれる。この年の春から夏にかけては、日本の発展を予感させる明るいニュースが相次いだのである。

『三丁目の夕日』の第2作『ALWAYS 続・三丁目の夕日』（07 山崎貴）に描かれるのは、この59年春だ。

もちろん、まだ戦後の混乱や貧困は残存していた。決して『三丁目の夕日』が扱った明るい面ばかりがあったわけではない。春の労働争議は深刻だったし、翌60年の日米安全保障条約改定反対の運動も始まっていた。9月には伊勢湾台風が明治以後最大の台風被害をもたらし、5000人を超す死者を出した。56年に発生が確認された水俣病の原因物質が有機水銀だと公表されたのもこの年、沖縄の宮森小学校に米軍機が墜落して児童11人を含む17人が死亡する事故があったのもこの年である。

それでも、小学校に入ったばかりのわたしたちの目からすれば、自分たちの前に輝かしい未来がやってくるかのような出来事が次から次へと起きてるように見えた。前年58年にデビューした長嶋茂雄はたちまち少年たちの大スターになり、のちにON砲と呼ばれる王貞治は59年に巨人に入団し高卒ルーキーとして注目を集めた。相撲では、大鵬が18

歳の若さで五月場所に新十両となり、早くもスターの呼び声が高かった。61年秋場所後に同時横綱昇進し「柏鵬時代」を築く柏戸は58年に新入幕を果たし、59年春場所にそれまでの富樫（本名）から角界伝統の四股名・柏戸を襲名した。

プロ野球も相撲も、当時のテレビで最もポピュラーな中継番組だった。野球は巨人が長嶋人気で席卷し、59年6月25日の後楽園球場における巨人・阪神の昭和天皇天覧試合では長嶋、王がホームランを放ち長嶋が阪神のエース村山実からのサヨナラ本塁打という劇的幕切れでファンを熱狂させた。この試合をテレビで観た記憶がある。相撲は、若乃花、栃錦の二大横綱に、この年夏場所に横綱昇進した朝潮が加わって、彼らを頂点にした相撲人気テレビ視聴者を興奮させた。

しかし映画界にとっては、テレビの急速な普及は大きな脅威となっていく。テレビが200万台を突破する59年は、日本映画興行成績の分水嶺となった。終戦直後の46年に約7億3千万人だった年間映画観客数は58年に約11億3千万人となり日本映画黄金時代を形成したが、59年からは減少の一途を辿ることになる。早くも62年には約6億6千万人と7億人を割り込み、46年の水準を下回ってしまった。

それに伴い、映画館数も60年の7457館をピークに減少に転じ、5年後の65年には4641館にまでなった。日本映画製作本数も60年の547本が最大で、65年には267本（この頃登場したピンク映画を除く）になっている。全体の興行収入こそ、入場料の値上げにより63年までは上昇を続けたものの、その後は年々少なくなっていくばかりだった。

## ■各社の人気若手スター

この時期の日本映画を支えていた若手人気スターは次のような人々だった。

54年デビューでこの年の『新諸国物語 笛吹童子』（54 萩原遼）で一躍人気スターとなった東映の中村（のち萬屋）錦之介（1932～97）は『一心太助』シリーズ（58～63）などの時代劇で根強い支持を受け、『宮本武蔵』5部作（61～65 内田吐夢）でトップスターの座を固める。

日活 56年デビューの石原裕次郎（1934～87）は、『嵐を呼ぶ男』（57 井上梅次）で最初の大ヒットを飛ばし、以来『赤いハンカチ』（64 舛田利雄）まで8年間に19本もの興行収入2億5千万円（現在の物価水準だと17億円程度か）以上の作品に主演した。

同じく日活 56年デビューの小林旭（1938～ ）は『南国土佐を後にして』（59 斎藤武市）を転機にした『渡り鳥』シリーズ（59～62）で人気者となり、『銀座旋風児』シリーズ（59～63）などで活躍するとともに、62年の歌手・美空ひばりとの結婚、64年の離婚で芸能界の話題を賑わわせた。

大映では54年デビューの勝新太郎（1931～97）が、『不知火検校』（60 森一生）で『座頭市』シリーズ（62～89）に連なる鉦脈を掘り当て、田宮二郎とコンビの『悪名』シリーズ（61～74）とともに人気を不動のものにしていた。

同じく 54 年デビューの市川雷蔵（1931～69）は、文芸映画『炎上』（58 市川崑）に主演して主演男優賞を総ナメにしたところからスターダムにのし上がり、『薄桜記』（59 伊藤大輔）、『ぼんち』（60 市川崑）などを経て『忍びの者』シリーズ（62～66）、『眠狂四郎』シリーズ（63～69）でファンを魅了する。

彼らは専ら、当時の日本映画における興行面での主流である時代劇、アクションといった分野で活躍することが求められた。若者だけが観客対象になってしまう青春映画は、黄金期の日本映画では傍流扱いでしかなく、二本立て上映の添え物とか看板番組の谷間を埋める存在だったのである。

わずかに石原裕次郎だけは、あくまでアクション映画を主軸としながらではあるが、青春映画にも主演作を多数持っていた。デビュー作『太陽の季節』（56 古川卓己）、初主演作『狂った果実』（56 中平康）がいずれも兄・石原慎太郎の巻き起こしたブームに乗った「太陽族映画」と呼ばれる反社会的青春映画であったことから、青春スターとしてのイメージがこびりついたのだろう。

反社会的ではない青春文芸映画として用意された石坂洋次郎原作『乳母車』（56 田坂具隆）で好青年役を認められた後は、アクションもので一気に大人気スターの座を獲得し、その傍ら石坂原作の『陽のあたる坂道』（58 田坂具隆）『若い川の流れ』（59 田坂具隆）『あじさいの歌』（60 滝沢英輔）『あいつと私』（61 中平康）『若い人』（62 西河克巳）に年 1 本のペースで主演していく。特に『陽のあたる坂道』『あいつと私』は大ヒット作となる。

とはいえ、この時期の裕次郎作品の多くはアクションであり、60 年代半ばに三十路を迎えると、サラリーマンもの、ムード・アクション、メロドラマや時代劇、歴史ものなどへ舵を切っていく。

### ■吉永小百合——時代の転換期に現れたスター

結局、60 年代半ばの日本映画界で青春スターの名声を独り占めしたのは 59 年にわずか 14 歳でデビューした吉永小百合（1945～）だった。60 年に日活へ入社し、『ガラスの中の少女』（60 若杉光夫）で早くも主演する。当時は浜田光曠と名乗っていた浜田光夫（1943～）とのコンビもここから始まった。なお、この作品は後藤久美子、吉田栄作のコンビで 88 年にリメイクされている（監督は出目昌伸、なかなかの秀作だ）。

裕次郎青春映画がそうであったように、日活青春映画の王道は石坂洋次郎原作である。主演 2 作目の『花と娘と白い道』（61 森永健次郎）、浜田が光夫名義になった『この若さある限り』（61 蔵原惟繕）『草を刈る娘』（61 西河克巳）と立て続けに石坂作品に主演して浜田とのコンビによる青春路線を確立した。人気も高騰し、61 年度には製作者協会新人賞を受賞。吉永ファンが「サユリスト」と呼ばれるようになったのはこの頃からだと言われる。

翌 62 年、代表作『キューポラのある街』（62 浦山桐郎）でブルーリボン主演女優賞を受賞し、新人スターから大スターへと一足飛びに駆け上る。そこから 60 年代中盤までは、『赤い薔と白い花』（62 西河克巳）『若い人』（62 西河克巳）『青い山脈』（62 西河克巳）『雨の中に消えて』（63 西河克巳）『美しい暦』（63 森永健次郎）『光る海』（63 中平康）『こんにちは、20 歳』（63 森永健次郎）『風と樹と空と』（64 松尾昭典）『悲しき別れの歌』（65 西河克巳）『青春の海』（67 西村昭五郎）『だれの椅子？』（68 森永健次郎）『花ひらく娘たち』（68 斉藤武市）と、総計実に 14 本もの石坂作品がある。

その間、『伊豆の踊子』（63 西河克巳）『潮騒』（64 森永健次郎）などの文芸青春映画、『愛と死をみつめて』（64 斉藤武市）『愛と死の記録』（66 蔵原惟繕）のような難病悲恋もののヒット作もあり、63 年から 66 年までは石原裕次郎と並ぶお正月映画の看板となった。

先に挙げた 5 人の男優が日本映画黄金時代最後の大スターとするならば、吉永小百合はテレビが映画を脅かしていった時代、つまり戦後の文化、芸能、スポーツがひとつの転換点を迎え世代交代する時期に登場してきた新しいスターだった。長嶋、王、大鵬、柏戸といったテレビ時代のヒーローより、彼女はさらに年少だったのである。

『赤い薔と白い花』の主題歌「寒い朝」で歌手デビューした吉永は、これが 20 万枚、次の橋幸夫とのデュエット曲「いつでも夢を」が破格のヒットとなり、「いつでも夢を」で 62 年度日本レコード大賞を受賞し年末の紅白歌合戦に出演した。その後はさしたるヒット曲がなかったにもかかわらず、66 年まで 5 回連続で出場している。

当時の紅白歌合戦は、視聴率が 80% 近くもあるテレビ界最大の番組だった。石原裕次郎は、同時期に「銀座の恋の物語」「赤いハンカチ」「二人の世界」などのメガヒット曲を出していたが、決して出演しようとしなかった。同じく数多くのヒット曲を出していた小林旭も、出演するようになったのは日活がロマンポルノに転ずるなど従来の映画界の体制が崩壊した 77 年になってからのことだった。それは、映画界の大スターの、テレビというものに対する気持のけじめだったのではなかろうか。

だが、吉永たちの世代になると自身のこだわりもなかったろうし、映画会社自体もスターが歌の世界やテレビで知名度を上げることが興行成績に反映するという期待を抱かざるを得なかったのかもしれない。また、逆に歌謡界やテレビの人気者を借りることで興行に結びつけたいという目論見もあっただろう。

## ■「ザ・ヒットパレード」と「ロッセ歌のアルバム」

草創期のテレビは、まだ自前のスターを養成するには至らない。テレビ女優第一号といわれる黒柳徹子は 53 年の NHK 入社である。『トットチャンネル』（87 大森一樹）には、その時代のテレビ界がいきいきと描かれる。61 年から 64 年まで放映された NHK 連続テレビドラマ「若い季節」では、黒柳以外の出演者は演劇、古典芸能でなければ歌手出身だっ

た。多くの歌手がテレビドラマで演技をしていた時代である。スターのほしい映画界が彼らに目をつけないわけがなかった。また、ヒット曲をそのまま映画の題名にすることで認知度を高める効果も期待された。

当時最も知られた歌番組は、水曜（のち火曜）夜の「ザ・ヒットパレード」（59～70 フジテレビ系列）と日曜昼 12 時台の「ロッセ歌のアルバム」（58～79TBS 系列）だった。前者はロカビリー歌手のミッキー・カーチスや長沢純が司会してポップス系の歌手が出演し、後者は歌謡ショーの司会に定評がある玉置宏が仕切って演歌、歌謡曲系の歌手が出演するのが常だった。

先に映画界へ若い歌手たちを送り出したのは「ザ・ヒットパレード」の方だった。東宝『檻の中の野郎たち』（59 川崎徹広）は、表題の守屋浩の曲を主題歌に、守屋、ミッキー・カーチス、山下敬二郎のロカビリー歌手 3 人が少年院を脱走する若者に扮する。他にも、坂本九、水原弘、ジェリー藤尾、ザ・ピーナッツなどポップス系の人気歌手が総出演している。

スパーク 3 人娘と呼ばれた中尾ミエ、伊東ゆかり、園まりの 3 人組、元祖男性アイドルグループの長沢純ら 3 人のスリー・ファンキーズ、ダニー飯田とパラダイスキング、森山加代子、渡辺トモコ、田辺靖雄、九重佑三子といった面々も松竹、東宝、東映、日活、大映と各社の映画に顔を出した。しかし、群を抜いたスターがいなかったため、集団で主演したり映画俳優たちが演じる物語に彩りを添えたりする役目にしか活用されなかったことは否めないものがある。

わずかに坂本九が、日活が彼の代表曲を映画化した『上を向いて歩こう』（62 舛田利雄）をはじめ 5 社すべてにわたり 13 本の主演映画を撮っている。ただし、そのほとんどは三枚目的キャラクターを生かした喜劇風作品であり、青春スターとして人気を博したわけではなかった。

一方「ロッセ歌のアルバム」の側に主に出演していたのは演歌系、歌謡曲系の歌手が多かった。坂本九など「ザ・ヒットパレード」と重複して出演する者もいたが、三橋美智也、春日八郎、三波春夫といったテレビ時代以前の世代が中心という印象だったため新世代の若い人気歌手登場という雰囲気は薄かった。

### ■橋幸夫——時代劇から青春恋愛ものまでこなした御三家の雄

そこへ颯爽と現れたのが橋幸夫（1943～）だった。60 年股旅ものの演歌「潮来笠」でデビューと同時に人気を集め、まだ顔ににきびの残る高校生歌手は 60 年度日本レコード大賞新人賞を獲得し、紅白歌合戦に初出場した。鹿児島島の伯父の家へ一人旅して大晦日を迎えていた 8 歳の小学 2 年生であるわたしは、出場者中最年少の高校生のお兄ちゃんが堂々と歌う姿にテレビの前の大人たちが感嘆と賞賛の声をあげたのを覚えている。

股旅ものといえば時代劇の定番である。早速『潮来笠』（61 井上昭）として大映で映画

化され、橋は歌の場面で映画初出演を果たす。この年、時代劇の牙城である京都太秦の大映撮影所で、なんと8本もの橋幸夫がらみの時代劇が作られた。「潮来笠」に続く股旅もの演歌を映画化したものもあったし、市川雷蔵主演の『杵掛時次郎』（61 池広一夫）のように時代劇の主題歌を橋が歌って出演もするという形もあった。

そのうちの2本は橋の主演であり、デビュー2年目にして歌と映画の二足の草鞋を履く多忙ぶりだった。この人気をさらに拡大するため、62年年頭に発売された曲「江梨子」は股旅ものとは全く方向を変えた現代恋愛歌であり、狙い通りこれも大ヒットした。そして『江梨子』（62 木村恵吾）で、橋は青春恋愛映画に主演することになる。相手役の江梨子を演じる三条江梨子は、三条魔子の名で59年に新東宝でデビューして清純派女優として活躍、61年新東宝倒産に伴い大映へ移籍していた。この作品のために芸名を改めさせるほど会社が力を入れていたことがわかる。その甲斐あって映画もヒットした。

このヒットにより、以後の橋は股旅など時代もの演歌と青春歌謡の両刀を使って人気街道を突っ走る。前者では、西南戦争を背景にした『悲恋の若武者』（62 西山正輝）に主演して再び三条江梨子と共演した後、東映『花の折鶴笠』（62 河野寿一）で大川橋蔵と共演、松竹『瞼の母より 月夜の渡り鳥』（63 市村泰一）では倍賞千恵子を相手役に主演するなど活動の舞台を広げた。

しかし何よりの出来事は、日活青春映画の人気スター吉永小百合とのデュエット曲「いつでも夢を」の誕生である。この曲は前述のように大成功し、当然のごとく日活『いつでも夢を』（63 野村孝）として映画化され多数の観客を集めた。これで、橋幸夫の歌う曲の主流は青春歌謡の方であることが明確になる。映画も、その歌に乗った青春映画が次々と作られた。

松竹で『若いやつ』（63 市村泰一）『舞妓はん』（63 市村泰一）『花の舞妓はん』（64 市村泰一）と倍賞千恵子とのコンビで立て続けに主演する。その次の『孤独』（64 市村泰一）は暗い内容の因縁話だったが、サーフィンのリズムを取り入れたこの映画の主題歌「恋をするなら」が大ヒットして橋の青春歌謡は「リズム歌謡」の方向へ進む。続くヒット曲「チェッチェッチェッ ～涙にさよならを～」が『涙にさよならを』（64 前田陽一）となり、『すつとび野郎』（65 市村泰一）を経てリズム歌謡の代表作「あの娘と僕 ～スイム・スイム・スイム～」が『あの娘と僕～スイム・スイム・スイム～』（65 市村泰一）となる。

次の『赤い鷹』（65 井上梅次）は任侠の世界にからむ活劇もので、「残侠小唄」という演歌風の曲を主題歌としたが、『雨の中の二人』（66 桜井秀雄）は同名の大ヒットしたりズム歌謡にあやかる田村正和と中村晃子の恋物語で、橋は「橋幸夫」としてチラッと出演し歌を披露するにとどまっている。このカメオ的な出演の仕方は、竹脇無我と早瀬久美が主演の『汐風の中の二人』（66 桜井秀雄）でも同じで、全盛期の橋の多忙ぶりが反映されていると思われる。

それでも、同名のヒット曲を映画化した倍賞千恵子との『恋と涙の太陽』（66 井上梅次）、

由美かおるとの『シンガポールの夜は更けて』（66 市村泰一）『バラ色の二人』（67 桜井秀雄）『恋のメキシカンロック 恋と夢の冒険』（67 桜井秀雄）、歌手の黛ジュンとの『夜明けの二人』（68 野村芳太郎）、『恋の乙女川』（曲は「乙女川」68 市村泰一）とコンスタントに主演していく。

そんな中、『男なら振りむくな』（67 野村芳太郎）だけは歌謡映画ではなく、加賀まりこを相手役に田村正和、渥美清、小沢昭一等々の豪華な脇役を得て、当時の松竹の看板監督のひとり野村芳太郎が石原慎太郎の原作を映画化したものであり、橋幸夫主演作の中では異彩を放つ。橋が、単に歌手の余芸ではなく俳優として通用していたことを物語る。64年から68年まで毎年、主演作が松竹のお正月興行を飾っていたことも、この時期の彼の映画界における重要な位置を物語っているといえよう。

ただ、橋幸夫主演の青春映画は話が旧態依然としたものが多く、ヒロインが舞妓とか女中とかいった貧しい娘で、それを、あるときは豊かな家庭にのびのび育った青年、またあるときは同じく貧しい青年である橋が守り通すというようなウェットな雰囲気になっていた。「焰のように燃えようよ 恋をするなら愛するならば～」と明るく現代的な歌詞と曲の「恋をするなら」を主題歌にした『孤独』の暗い展開など、その典型である。

古い家族関係の中にホームドラマを作っていく松竹の伝統が、64年の東京オリンピックから70年の大阪万博へと急速に豊かになる世の中と急激に変化する社会意識に追いつかなかったのかもしれない。時代と密接に結びついた鮮度の良い青春映画を生むには至らないままだった。

### ■舟木一夫——日活を主戦場に数々の青春映画に出演

この橋幸夫とともに60年代に歌謡界の人気アイドルとなり「御三家」と称されたのが、舟木一夫、西郷輝彦である。歌謡御三家の人気はテレビによって高まり、映画界が彼らに斜陽状態からの脱出の夢を託したのである。それまでの映画スターたちは、撮影所や演劇の舞台から登場していた。初めてテレビから現れたスターがこの三人なのだった。

舟木一夫（1944～）は63年に「高校三年生」でデビューしていきなりの大ヒット、続く「修学旅行」「学園広場」もヒットして63年度レコード大賞新人賞に輝き、紅白歌合戦出場を果たした。学生服姿で高校生活を題材にした歌を唄う爽やかな若者ぶりが、人気を加速させていく。大映『高校三年生』（63 井上芳夫）で姿三千子、倉石功の高校恋愛劇に同級生役で顔を出し、主題歌を歌った。

同じく姿三千子、倉石功コンビの『続・高校三年生』（64 弓削太郎）は、前作が舟木の出身地愛知県を舞台にしていたのに対し、東京の高校が舞台だ。ここでも舟木は二人の友達役で出演している。

一方日活で、山内賢、松原智恵子の『学園広場』（63 山崎徳次郎）、浜田光夫、松原智恵子で働く青年を描く『仲間たち』（64 柳瀬観）に出演、こちらではかなり重要な役に起

用された。そして東映『君たちがいて僕がいた』（64 鷹森立一）では高校生たちの中心になり、本間千代子を相手役に初主演を果たす。『夢のハワイで盆踊り』（64 鷹森立一）が二作目の主演作だ。

山内賢、和泉雅子で大学生と女子工員の恋を描く日活『ああ青春の胸の血は』（64 森永健次郎）、山内賢、西尾三枝子がそれぞれチンピラと女子工員を演じる『花咲く乙女たち』（64 柳瀬観）ではいずれも友人役で助演したが、『北国の街』（65 柳瀬観）では和泉雅子を相手にラブシーンもあるなど本格的に主演し、山内の方が友達役で支えた。

『東京は恋する』（65 柳瀬観）では伊藤るり子、『高原のお嬢さん』（65 柳瀬観）『哀愁の夜』（66 西河克巳）『友を送る歌』（66 西河克巳）では和泉雅子を相手に主演する。そして『絶唱』（66 西河克巳）では、それまでの主演作が山内賢、和田浩治、藤竜也といった同世代の男優が友人役として脇から支えていたのと違い、和泉とのコンビで、三度映画化された戦前が舞台の大江賢次原作の古典的ラブストーリーを、滝沢修、花沢徳衛、奈良岡朋子らのベテランに伍して演じきった。

十朱幸代が相手の『北国の旅情』（67 西河克巳）は、日活青春映画の王道である石坂洋次郎原作で、倉本聰、山田信夫という当時の気鋭作家が脚本を担当、東野英治郎、北林谷栄らが脇を固める。松原智恵子との『夕笛』（67 西河克巳）では島田正吾と共演した。舟木一夫の日活歌謡青春映画は絶頂期を迎えていた。

ところで青春歌謡の他に、64年頃から「銭形平次」66に代表される時代物歌謡にも芸域を広げていた舟木は、『一心太助 江戸っ子祭り』（67 山下耕作）で東映時代劇にも登場し、藤純子との共演で太助、將軍家光の二役を演じた。かと思えば東宝で、『その人は昔』（67 松山善三）『君に幸福を センチメンタル・ボーイ』（68 丸山誠治）に主演し、売り出しの少女アイドル内藤洋子と共演する。

とはいえ、舟木一夫の本拠が日活であることは明白だった。『君は恋人』（67 斎藤武市）は、前年の事故で右目を負傷し1年4ヶ月の休養を余儀なくされた浜田光夫の復帰記念作であり、舟木の出演作でこの作品だけが彼の曲ではなく浜田の歌の方がメインだ。しかし、吉永小百合、和泉雅子、松原智恵子、渡哲也、高橋英樹、山内賢、和田浩治と日活青春スターが総出演し、石原裕次郎、小林旭、宍戸錠、二谷英明、川地民夫、浅丘ルリ子、芦川いづみ、山本陽子と俳優陣が全員顔を見せる、いわば日活挙げての映画に顔を並べていること自体、日活との密接な結びつきを物語っている。吉永小百合主演のオールスターによる68年お正月映画『花の恋人たち』（67 斎藤武市）にも男優陣のひとりとして登場した。

自分の曲をテーマにした主演作は、日活で松原智恵子と『残雪』（68 西河克巳）、『青春の鐘』（69 鍛冶昇）と続き、場を松竹に移して尾崎奈々との『永訣』（曲は「永訣の詩」69 大庭秀雄）、光本幸子との『いつか来るさよなら』（69 川頭義郎）が出る。しかし橋も舟木も、このあたりで、一枚看板として映画に主演するだけの人気を失ってくる。1969年、歌謡界にも新しい波がきていた。



それでも、橋幸夫は61年から69年までに31曲、舟木一夫は63年から69年までの間に25曲に及ぶ自身のヒット作が映画になったということ自体、空前絶後のことだろう。橋は東宝以外の全社、舟木は当時の日本映画5社のすべてに出演作を持つ。歌謡界が息の長い人気歌手を持つことができ、映画界が全盛期の余韻をまだ持っていた時代ならでは、歌謡曲と映画の「メディアミックス」だった。

### ■西郷輝彦——後に俳優專業になった演技派

もうひとりの御三家、西郷輝彦(1947～)を忘れてはいけない。64年「君だけを」でデビューし、次の「十七才のこの胸に」ともどもヒットさせ、64年度レコード大賞新人賞を受賞しNHK紅白歌合戦初出場を果たす、という登場の仕方は橋、舟木と全く同じである。ただ、他の二人が戦中の生まれなのに対し、西郷は戦後生まれ、団塊の世代だ。

橋や舟木が助演から始めたのに対し、東映『十七才のこの胸に』(64 鷹森立一)でいきなり主演デビューする。しかも物語は西郷の出身地・鹿児島が舞台にされるというお膳立てまでである。本間千代子との共演で、つつがなくこなした。次の『あの雲に歌おう』(65 太田浩児)は本間千代子の曲の映画化で、西郷は高校生群像劇の一員として登場する。

松竹『我が青春』(65 堀内真直)は西郷輝彦のヒット曲の映画化で主演作。まるで彼自身のような歌手 デビューから新人賞獲得、映画界へも進出というシンデレラストーリーを演じた。同じく日活『涙をありがとう』(65 森永健次郎)は高橋英樹主演のアクション映画であり、西郷は彼を慕う歌手の卵だ。大映『狸穴町0番地』(曲は「始めからもういちど」65 木村恵吾)は高田美和主演の狸が人に化ける喜劇。西郷は脇役だ。

日活『星と俺とできめたんだ』(65 井田探/曲は「星娘」)は西郷輝彦主演で、アルバイトにクラブで唄う剣道青年だが、彼と松原智恵子との恋を渡哲也と十朱幸代の大人の恋が補強して成り立つ。『この虹の消える時にも』(66 森永健次郎)は少年院帰りの若者と盲目の少女の恋を松原智恵子とのコンビで描く。『涙になりたい』(66 森永健次郎)では西郷の主人公と松原は異父兄妹で、親たち同士の和解を目指す。

『星のフラメンコ』(66 森永健次郎)は、西郷輝彦最大のヒット曲の映画化である。ここでも松原智恵子とは兄妹で、戦後台湾から帰国せぬままの母を探す。台北や高雄でロケを行っている。相手役は台湾女優の汪玲。『傷だらけの天使』(66 吉田憲二)は、西郷自身の作詞・作曲(ペンネームは、作詞が我修院建吾、作曲が銀川晶子)の曲が主題歌で、松原が少年院帰りの主人公の幼なじみの恋人になる。『恋人をさがそう』(67 森永健次郎)では西郷は松原と結ばれず、梓英子が相手になる。

その後、西郷輝彦は日活を離れ、主題歌「若鷺の歌」を歌った東映のオールスター戦争映画『あゝ予科練』(68 村山新治)で谷隼人、長沢純らと予科練習生を演じたり、美川憲一のヒット曲を栗塚旭主演で映画化した松竹『鉏路の夜』(68 井上梅次)『霧のバラード』

(69 梅津明治郎) に、いずれも「西郷輝彦」役で顔を見せる。

松竹『海はふりむかない』(69 斎藤耕一) は、西郷輝彦主演歌謡青春映画の最後の作品となった。西郷は、64 年から 69 年までに 12 曲が映画化されたわけで、これは橋、舟木に比べ半分以下の数字でしかない。しかしその演技力には定評があり、そのために歌手として全盛期を過ぎた後は、テレビドラマ「どてらい男(やつ)」(フジテレビ系 73~76) 及び映画化された東宝『どてらい男』(75 古沢憲吾) に主演するなど俳優として活躍する。

だが『海はふりむかない』は、西郷の、というだけでなく歌謡御三家主演作の中で最も良質な映画だと思う。御三家映画は無難なベテラン娯楽映画専門監督が手がけることが多く、また、多作されたために短期間で企画を脚本化せねばならず、古臭いありきたりの話になってしまうことが多かった。ところがこの作品は、監督、撮影、音楽をひとりでこなした『囁きのジョー』67 で鮮烈なデビューをした後、御三家の次世代アイドルであるグループサウンズを主演にした新感覚の音楽映画で注目を集めていた新鋭・斎藤耕一監督ということで、一気に新味が出た。

舞台は横浜。観光ガイドのアルバイトで気ままに暮らす主人公・礼次(西郷輝彦) は、エリートの兄(勝部演之) が出世のため恋人・美枝(尾崎奈々) を捨て社長令嬢(夏圭子) と結婚しようとしていることに反発する。美枝に同情する礼次は、彼女が原爆症に冒されていることを聞かされる。兄にそのことを告げ、見舞ってやってほしいと頼むが無視され、礼次は荒れる。余命短いと知った美枝は、独り故郷の広島へ帰って行った。

そうやって初めて、礼次は自分が彼女を愛してしまっていることに気づく。彼は広島へ向かい、再びめぐり逢った二人は幸福な時間を過ごすのが、美枝は病に負け天に召されてしまうのだった。

……と書けば、どこが良質? と言われそうだ。たしかに、話自体は特に卓越したものではない。どこかで見たような難病悲恋ものと思われても仕方ないだろう。

それが映画としての魅力を感じさせるのは、ひとえに映像の効果だ。カメラマン出身の斎藤監督は、斬新なカメラワークで横浜の街の姿をヴィヴィッドに見せる。広島の街はもっと新鮮に映る。原爆慰霊式典などの映像で何度となく目にする平和公園が、全く雰囲気異なる叙情的な空間に感じられるし、街全体が二人の恋愛を包みこむ舞台に思えてくる。その中で、22 歳の西郷と 21 歳の尾崎の生身の若さが躍動するのである。

現実の広島が原爆の惨禍に遭ってから、まだ 24 年。街は繁栄していても、その背後には、美枝のように後遺症に苦しむ若者たちがたくさんいた。この映画では、そんな、現実に動いている 1969 年の日本社会が、ドキュメンタリー映像のように存在感を示していた。それは同時に、時代の真っ只中にある青春像の提示だったといえる。そのところが、当時高校 2 年生だったわたしの胸を揺さぶったのだろう。

## ■歌謡御三家の失速、そして 70 年代へ

60年代が終わろうとしていた。歌謡御三家を生んだテレビの時代はますます進展を遂げる。59年に200万だったテレビ台数は、64年の東京オリンピックを前に急増し、63年には1500万を突破し、67年には2000万を超えて、ほぼ1世帯に1台、100%普及する。また60年にはカラー放送が開始され、カラーテレビも少しずつ普及して71年には白黒テレビの半分に及び、75年には全部がカラーになり白黒テレビはほぼ姿を消した。

71年に大学に入り東京で一人暮らしを始めたわたしは、半年後に秋葉原で安い小さな白黒テレビを手に入れたが、鹿児島の高親の家は札幌オリンピックのあった72年にカラーテレビを買った。こうしてテレビが学生の下宿にまで普及し、一般家庭はカラーになっていく中で、テレビの人気は映画をはるかに上回るようになり、数々の人気番組が生まれた。

ドラマは初期の生放送からビデオ収録の形に変わり、63年から始まったNHK大河ドラマなど多様な人気ドラマを生んだ。映画の強敵である。歌番組も、新しく64年からNHK「歌のグランドショー」、68年からフジテレビ「夜のヒットスタジオ」が生まれた。

また、東京オリンピックのために新幹線や高速道路が整備されていく中、この頃を境に国民の生活が急激に豊かになっていく。62年の『キューポラのある街』では、まだまだ極貧を思わせる庶民生活が描かれていたが、60年代後半になるとそういった生活ぶりは表面からは姿を消す。60年から64年に在任した池田勇人首相の所得倍増計画は実現し、高度経済成長の恩恵が行き渡るようになったのである。

そんな中、大衆が憧れるスターの在り方も変わってくる。歌謡御三家のヒット曲も、橋幸夫は67年の「恋のメキシカンロック」、舟木一夫は67年の「夕笛」、西郷輝彦も67年の「恋人をさがそう」あたりが最後だったように思う。66年のビートルズ来日以来、エレキギターを基軸とするバンドが次々と現れ、グループサウンズ(GS)ブームが訪れていた。一方でフォーク系の音楽が台頭してきた。

映画での共演がなかった御三家が一同に会する『東京・パリ 青春の条件』(70 斎藤耕一)は、彼らの全盛期だったら「夢の競演」とされ大きな話題となっただろう。だが、70年代を迎えようとする時点ではもはや「過去の人」に近くなったスターの集合でしかなかった。パリにまで出向いてロケを行い、黛ジュン、三田明、69年度のレコード大賞新人賞を取ったばかりのピーターなど何人もスター歌手を動員したにもかかわらず、いや、そのために話が散漫になり、斎藤監督の力をもってしても単なる顔見世映画にしかできなかった。

一世を風靡した歌謡御三家の時代は終わったのである。